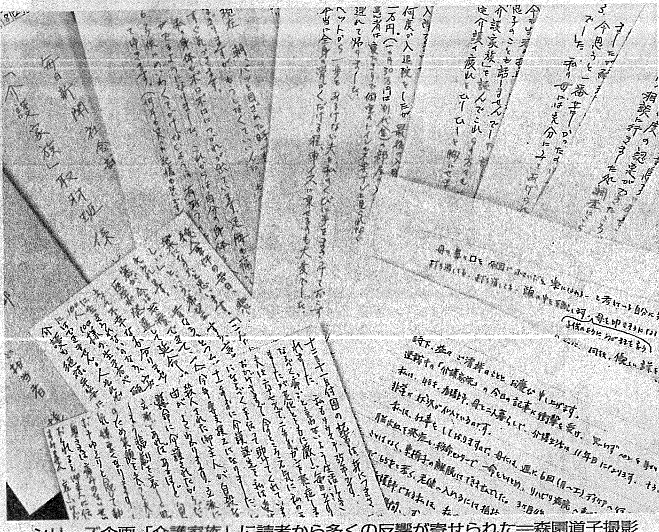
自らに重ね　涙の反響

在宅介護の担い手の実情に迫るシリーズ企画「介護家族」。12月7日からの連載「殺人事件の『告白』」（計6回）に読者の皆様から多くの反響を頂きました。一部を紹介するとともに、毎日新聞が調査した介護殺人事件44件の詳細も掲載します。【「介護家族」取材班】

連載「殺人事件の『告白』」


シリーズ企画「介護家族」に読者から多くの反響が寄せられた＝森園道子撮影

「母の鼻と口を布団でふさいだら、楽になれる……と考えている自分に気付きます」

脳出血で体がまひした母親を11年間、自宅で介護しているという看護師(48)は連載の感想を手紙で寄せた。

事故で寝たきりになった母親を約11年間介護した末に殺害した長女を取り上げた連載5回目。この長女を自らに重ね、何度も読み返したという。「涙が止まりませんでした。まさに彼女は私でした。記事にいやされ、救われました」とつづった。

昼間はデイケアに母を預けて働き、夜は一人で面倒を見る。ショートステイ（短期入所）も何回か利用したが、母親が深夜に大声で叫ぶため、利用を拒まれている。

夜中のおむつ交換が頻繁になって「ちょっとはがまんしてよ！」ときつく当たったり、わがままを言われた時に母親をたたきそうになったりするという。手紙には「一番辛い思いをしているのは母なのに、なぜ、優しい言葉をかけることができないのか……と自分が情けなく、気付くと無意識に泣いていることがあります」と介護生活のつらさを記した。

リウマチの痛みに苦しみ、夫の介護を受けて、[illegible]市の女性(64[illegible]感想が届いた。[illegible]患者の妻を殺[illegible]性についての[illegible]目を読んで[illegible]きされた」という。

介護する夫も2年前にがんを患い、体調は万全ではない。女性が痛みのために笑顔を見せないでいると、機嫌が悪くなる。「なるべく『痛い』と言わないよう生活してきましたが、老化とともに厳しい毎日です」と悩みを吐露した。

リウマチの妻を殺害した男性について「立派に奥様を懸命に介護された。立派であればあるほど自分を追い込んでしまう悲劇を哀しく思います」と感想を述べた。

認知症の母親を4年半にわたり介護しているという女性(53)は「毎日他人事とは思えず、読むのが怖いと思いながらも読んでしまいます」とメールを寄せた。女性は「比較的、楽な介護生活を送っている私でさえ『殺してしまうかもしれない』という恐怖は常につきまとう」と告白した。

実際、約30年前に認知症の祖母を介護していた時には、何度も祖母を殺したいという衝動にかられたという。

女性は「介護が原因で、大切な人を自分の手で殺してしまう哀しい人たちがいる」と懸念し、認知症の患者たちとどう向き合うかを社会全体で考える必要があると訴えた。そして「介護をしている人たちが持っているノウハウをマニュアル化しておくべきだ」と提案した。

■連載の概要

①妻は認知症　魔の深夜

2012年8月、兵庫県姫路市の男性(78[illegible]認知症の妻（当時71歳）を絞殺した。夜中に[illegible]性をののしる妻をなだめようと、毎晩ドライ[illegible]に出かけていた。執行猶予判決を受けた男[illegible]取材に応じた。

②生き残ってごめん

47年間連れ添った妻を絞殺した姫路市の男[illegible]は拘置所で妻への思いをつづっていた。認知[illegible]でおかしくなった妻を懸命に介護した末の[illegible]行。「とにかく必死で余裕がなかった」と当[illegible]の介護生活を振り返った。

[illegible]昼夜叫ぶ夫を「楽に」

[illegible]07年9月、脳梗塞などで体をこわした夫（当[illegible]65歳）を絞殺した大阪の女性(70)は「夫を楽[illegible]してあげたかった」と供述した。夜も夫の大[illegible]やトイレ介助が続いた。「寝る間もない介護[illegible]私は気が狂っていた」

[illegible]痛みを見かねて

昼夜の区別がない介護に疲れてリウマチ患者[illegible]妻（当時67歳）を12年3月に刺殺した大阪の[illegible]性(70)。「見ていると、つらかった」と振り[illegible]った。出所した男性は家族に支えられたが、[illegible]の夏、妻の後を追った。

⑤母に「楽になろうか」

14年4月、大阪の民家で長女(48)が母親（当時63歳）の命を奪った。事故で寝たきりになった母親を約11年間、一日も休まず介護したが、うつ病の症状が出始めた。長女は法廷で母親への思いを語り、泣き崩れた。

⑥識者に聞く

介護現場や犯罪心理学に詳しい、高崎健康福祉大学大学院教授の渡辺俊之氏と東京工業大学名誉教授の影山任佐氏に、介護殺人の背景などを語ってもらった。

※記事は毎日新聞社のニュースサイト（http://mainichi.jp/kansai/）でご覧になれます。

その他の意見や感想

■脳梗塞や認知症の母を介護する大阪市の50代女性

兄に仕事してもらわないと母を養っていけず、介護は私一人でしている。何回か死のう、母を殺して一緒に死のうと思ったことが[illegible]ない。

■介護サービス事業者の50代元職員

昼夜逆転は介護者にはきつい。夜間に施設で預かってもらえると家族は少し助かるが、施設で夜勤する人が少ない。私も夜勤をしてきたが、きつい。社会全体が明日は我が身と思って真剣に取り組まなければ悲しい事件は繰り返される。介護に行政はもう少しお金をつぎ込んでほしい。

■愛媛県今治市の70代女性

夫を今年7月末に見送った。夫は夜の徘徊があり、私も働けなくなってわずかな貯金も底を突いた。耐えるしかなかったが、この連載の方々も先が見えなかった。追い詰められた在宅介護の疲れが分かり、ひしひしと胸に迫った。何年も笑った記憶もないですが、これからは自分の体を大事にしつつ、子どもに迷惑をかけないように笑って暮らしていきたい。

■大阪府枚方市の70代男性

今年10月、7年間の在宅介護の末に母をみとった。毎日5回のおむつ交換や、床ずれ予防の体位変換など、多忙の日々だった。毎晩一方通行だったが、いろいろなことを話しかけては涙、涙の連続。日々痩せ衰えていく母を見るのが、悲しくつらかった。介護の疲れや悩みの共有ができれば、介護にまつわる事件が減少するのでは。一日も早く安心して介護を受けられる社会が来ることを切望する。

■しゅうとめと父親が介護施設に入居中の兵庫県西宮市の50代女性

介護する側も介護される側も、それまでの生き方が問われると思った。「介護離職なし」「在宅介護の充実」などのかけ声は、お手伝いさんや子守を雇うのが当たり前の階級の人が作った幻想だと思う。財産がない人は本当に苦しいと思う。

■母親が入院中の50代男性

連載3回目に登場し、糖尿病などの夫を殺害した女性の気持ちが理解できる。私は体力とそれなりの収入もあり、ネットで情報収集ができるので、この女性のように一人で抱え込まずに何とかなっている。それでも、毎日泊まり込みの看病で体力的にも精神的にもストレスだ。いつまで続くのかも先が見えない。自分たちで情報収集しないと、生活が成り立たないことが悲しい。

毎日新聞が調べた介護殺人44件の一覧

	地域	加害者	被害者・主な病名など	加害者の不眠	加害者のうつの有無	加害者の介護状況や動機（裁判所の認定による）
2010年	兵庫	息子(51)	母親(85)・不明	－	－	仕事をせず介護に専念し、預金が底を突きそうになり心中を考えた
	兵庫	息子(48)	母親(80)・認知症	－	－	生活苦で介護サービスが受けられず、将来を悲観した
	奈良	娘　(42)	母親(67)・不明	○	▲	母親が夜中に何度も救急車を呼んで不眠になった
	東京	弟　(66)	姉　(78)・認知症	○	●	夜中にガスコンロを点火するなどの姉の不可解な行動で不眠となった
	東京	息子(52)	母親(80)・認知症	○	－	母親が深夜にうめき声をあげたり、たんをからませたりして、限界を感じた
	東京	夫　(71)	妻(69)・統合失調症	－	▲	自身も認知症となり、金銭的な不安や介護疲れから殺害を決意した
	神奈川	夫　(78)	妻　(72)・うつ病	○	－	「火事ですよ」などと叫びながら異常行動を繰り返す妻に追い込まれた
	神奈川	夫　(85)	妻　(79)・認知症	○	－	妻が深夜に徘徊（はいかい）を繰り返し、心身ともに疲弊した
	神奈川	姉　(65)	弟(61)・統合失調症	○	▲	急に怒鳴りつけるなどの弟の暴力的な言動のため、不眠や適応障害に
	埼玉	妻　(69)	夫　(78)・事故	－	－	36年間介護した夫に「もうだめだよ」と殺害を懇願された
	埼玉	夫　(67)	妻(60)・統合失調症	－	●	介護しているうちに自身もうつ病や腰痛を発症し、将来を悲観した
	千葉	夫　(77)	妻　(79)・認知症	○	－	妻が夜間に徘徊しないよう見守りをしたために不眠が続いた
	千葉	夫　(81)	妻　(78)・不明	－	－	寝たきりの妻の症状が改善せず悩み、介護にも負担を感じた
2011年	大阪	妻　(74)	夫(75)・頸椎の病気	－	●	左半身がまひした夫の介護で自身も腰痛に苦しみ、うつ状態に
	東京	息子(63)	母親(84)・認知症	－	－	自身の糖尿病が悪化、足腰の悪い妻の付き添いもあって思い詰めた
	神奈川	息子(47)	父親(78)・認知症	－	－	介護で自分の仕事にも支障をきたすなどと考え将来を悲観した
	神奈川	夫　(85)	妻　(81)・認知症	－	－	錯乱状態としか思えない妻の姿をあわれに思い、殺害を決意した
	神奈川	妻　(55)	夫　(66)・不明	－	－	重病で寝たきりになった夫の介護と自分の仕事で疲弊した
	神奈川	父親(67)	娘(39)・統合失調症	－	－	娘が自分の身の回りのことさえできなくなり、無理心中を図った
	千葉	息子(62)	母親(89)・認知症	－	－	母親の入院費や治療費の支払いで生活に困窮し、無理心中を図った
	千葉	夫　(87)	妻　(90)・認知症	－	－	自身も糖尿病が原因で要介護認定を受け、妻の介護に限界を感じた
2012年	大阪	妻　(83)	夫(84)・ぼうこうがん	○	－	昼夜を問わず2時間ごとに夫のおむつ交換をして不眠が続いた
	大阪	夫　(66)	妻　(67)・リウマチ	○	－	痛みに苦しむ妻を見て解放してあげたいと思い詰めた
	大阪	夫　(86)	妻　(84)・認知症	○	－	深夜に何度もトイレに行く妻を介護していたが、自身も大腸がんを患う
	兵庫	夫　(75)	妻　(71)・認知症	○	－	深夜から早朝までほとんど寝付かない妻の介護で疲労が蓄積した
	兵庫	夫　(77)	妻(73)・パーキンソン病	○	－	夜間に多数回のトイレ介助をして寝不足になり、追い詰められた
	奈良	母親(85)	娘　(62)・脳性まひ	○	●	娘を40年間介護してきたが、体力の衰えや不眠からうつ病を発症した
	滋賀	母親(73)	娘　(37)・自閉症	－	－	乱暴な言動が出るなど、娘の症状が悪化し、将来を悲観した
	和歌山	夫　(70)	妻　(66)・うつ病	－	－	物を床に投げたり、手足をばたつかせたりする妻の症状に思い悩んだ
	千葉	息子(48)	母親(83)・認知症	－	－	1人でトイレに行けず、自分が誰かもわからない母親をふびんに思った
2013年	大阪	母親(57)	娘　(29)・難病	○	●	介護を続けて自身もうつ病を発症し、娘の将来を悲観した
	大阪	夫　(80)	妻　(73)・認知症	○	●	妻が幼児のようになり、ショックを受けてうつ病に
	滋賀	夫　(83)	妻　(83)・認知症	－	－	自身も脳出血のため半身が不自由となり、妻の介護は困難と思った
	東京	息子(46)	母親(69)・難病	－	●	介護そのものだけでなく、費用の支払いへの不安からうつ病になった
	東京	夫　(79)	妻　(75)・うつ病	－	－	全ての家事を担っていたが、妻に「楽になりたい」と言われ心中を図った
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	○	●	母親の世話で不眠や食欲不振となり、うつ病を発症した
2014年	神奈川	妻　(75)	夫　(79)・認知症	－	－	認知症の症状で暴力的になった夫の介護で精神的に追い詰められた
	大阪	夫　(85)	妻　(80)・不明	○	●	介護を続けて不眠になり、好きな新聞も読む気がしなくなり、うつ病に
	大阪	娘　(46)	母親(63)・交通事故	○	●	事故で寝たきりになった母を11年間、介護してうつ病を発症した
	兵庫	夫　(66)	妻　(64)・認知症	○	－	介護や介護費用の不安などから、眠れない夜が続いて疲れ果てた
	東京	母親(72)	息子(54)・認知症	－	－	大便で部屋を汚すことを繰り返す息子を見て絶望的になった
	神奈川	息子(50)	母親(77)・認知症	－	－	大便を漏らしたり、暴言をはいたりする母親を衝動的に殺害した

※年齢は当時。●は事件当時うつ状態。▲は適応障害など

殺人44件　半数近く不眠

裁判記録を分析

連載開始と同時に、2010～14年の介護殺人44件＝一覧＝のうち、半数近くの加害者が深刻な不眠状態だったことを報じた。首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉）と近畿圏（大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、和歌山）の事件のうち、裁判記録を確認したり、関係者を取材できたりしたものを分析した。介護殺人の背景を分析した調査報道は初めてだ。また、裁判所は44件のほとんどについて、厳しい介護生活が続いて加害者を追い込んだと認定していた。警察庁によると、10年からの5年間に全国で起きた介護殺人（未遂含む）は242件。高齢化社会で在宅介護はさらに増えると見込まれている。

ネットでも話題

介護殺人の分析記事はネット上でも反響を呼んでおり、多くの介護経験者らが「不眠のつらさ」や国による支援を訴えている。

高校時代に父親を介護したという人はツイッターで「昼も夜もずっとばたばたしていて、しんどかった。目の前のことをこなすのに精いっぱいで、頭が回らなくなる感覚が本当によく分かる。昼にヘルパーさんに来てもらえても、夜は家族がやらざるをえない」と訴えた。

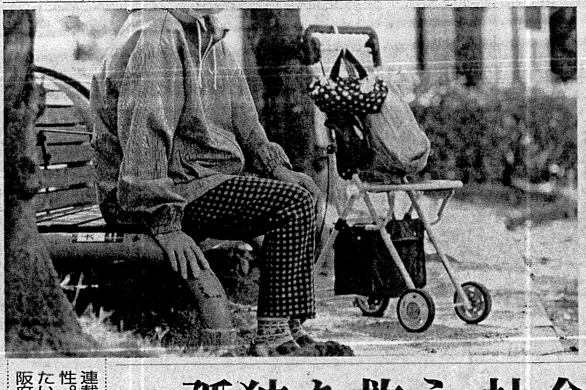
母親を在宅介護した経験を持つ50代女性はブログで「私の在宅介護時代も睡眠不足だった」とつづった。母親は夜に3回はトイレに起き、そのたびに母親が部屋に戻るのを確認するまで眠れなかったという。「朝から寝るまで仕事と家事と介護。薬をもらって寝たかったけど、夜中に何かあって起きられなかったら困る。寝不足だけど、寝られる状態ではない日々が続いた」と振り返った。

介護殺人を防ぐための対策を求める声も相次いでいる。

「こんな現実放置できない。日本の介護制度の脆弱性がこんな形で出るなんて。日本社会は病んでる」

「社会資源を活用することで減らせないか？　介護殺人が無くなることを願います」

「家族の介護負担はもう社会的問題。僕らができること、考えないと」


連載3回目に登場した女性。「夫の墓参りに行きたい」と話していた＝大阪府内で、山崎一輝撮影

ご意見・体験を

ご意見や体験をお寄せください。郵便は〒530-8251（住所不要）毎日新聞社会部「介護家族」取材班▽メール（o.shakaibu@mainichi.co.jp）▽ファクス（06・6346・8185）

孤独を救う　社会の評価

男性介護者を支援する会「TOMO」（京都市）代表　**林政広さん(67)**

シリーズ企画「介護家族」には多くの介護者が共感したはずです。

私も昨年まで9年間、認知症の母親を介護していました。介護殺人事件の加害者に不眠が多いという記事を読んで当時の自分を重ねました。私自身も介護で自分を見失い、母親に手をあげたこともあります。「自分も加害者になったかもしれない」という共感にも似た気持ちになります。

毎晩、何度もトイレに起きる母親の付き添いなどで疲れ果てていました。不眠の怖さは体だけでなく、心もおかしくなってしまうことです。気が落ち込み、多くの介護者が心身を疲弊して、自分を見失ってしまいます。

今の日本の社会では在宅介護は無償の営みと考えられがちで、ほとんど評価されることがないと思います。そうすると、介護者は無意識に代わりの何かを探そうとします。自分自身に負荷をかけて頑張りすぎるのです。

また、「介護をやり遂げたい」「大切な家族と離れたくない」という葛藤もあるのです。介護家族の絆は強いのです。

子育てが未来への懸け橋なら、介護は来し方への継承です。介護の尊さに本人や周囲が気付いたとき、「社会で認められている。苦境を周囲に話していいんだ」という思いが介護者を孤独から救い、支援につながると思います。

介護の社会的評価を高めて理解を広げる。これが介護者支援の第一歩だと思います。